へ 13
3334
3

門 へ13
3334
巻 8

瀧川

役行者御傳記圖會卷之下

浪華　藤東海　著

大正十八年　平安堂出版部

金峯山本尊出現之話
並行者山上ヶ嶽御登山前鬼後鬼之話

大和國吉野郡金峯山一名金ヶ御嶽と云ふ黄金山なのるよりなく名づく。また吉野山と云ふ郡の名よりなり。或説に天竺より飛來の峯ともいへり。常に金氣立て三國無雙の靈山なり。役行者ハ義覺義玄を驅して。鳴川山を下り。六田の郷より行吉の川を渡りて。荊棘を踏分登る事三十餘丁なり。ふゑに止り。山神金精大明神。神明帳に金峯神社吉野山の地主とあり。をたゝ。次に本尊の出現を祈り奉る。般若四經を誦して一七日に及べり。ときに時地藏菩薩出現なり。抑此菩薩ハ地德をたゝ。萬物に慈悲深く。二佛の中を一つづゝ。一切の衆生を化度し給へども。其相原輭にして。末世强剛の

河内國丹北郡松原新家村田八郎兵衛

衆生を化度せんと難〳〵とく道の谷へ拋玉ふ後世川上の荘神の合村に一宇の堂を
建立し地蔵菩薩を本尊とし奉る妹脊山金剛寺と号す是をよりの
地蔵と云傳ふ行者又心経を誦し玉ふ三七日すして弥勒菩薩出現し玉ひ是
も心を叶へ〳〵と擲ちくハ給ひ御ことくふうせ玉ふ是より一千日の御修行ありけ
ハ蔵王權現出現し玉ふ其相青黒念怒ふして左の手に剣印を結び腰をかゝ右の
手に三股杵を執く巖窟より出昔霊山に在く妙法を説今金剛宇金剛
蔵王の身を現ぜと直に虚空を踏く山上ヶ嶽の方へ飛去り玉ふ行者八是を倣し
昂尊像を等身に作りて本尊と玉ふ仏量二丈六尺なり次に十五童子出現
して行者を守護し玉ふ経護童子福集童子常行童子集飯童子宿
善童子禅前童子羅綱童子撿増童子後世童子虚空童子剣光童
子悪除童子香精童子慈悲童子除魔童子以上十五童子なり経護童

子より羅綱童子まで七童子と金剛山に置八童子と後に山上ヶ嶽に置玉ふ又
本尊の脇に八左に観世音菩薩二丈右に彌勒菩薩二丈をそへ玉ふ後に行者
の尊像を安置し堂塔僧舎を建立ス扨役行者八天の川に入り柴上
八山上ヶ嶽に登り洞川の北を流る十津川に入る清水なり此所に籠り一千日之
間御修行ありて大峯の嶮路を開ん願を祈玉ふ或時岩中に琵琶の響微妙に
聞へしハ琵琶山と号す後に一寺を建立し白飯寺と云又弘法大師八役
行者の御高徳を慕ひ此所に千日の行をなし玉ふ辨財天女出現し給ふ
大師自天女の尊像を彫刻して安置し玉ふ後世に至り十一村の氏神と崇奉り
天の川辨財天是なり行者八是より山上ヶ嶽へおもむきなり抑山上ヶ嶽八吉の山
より南方に二里ありて山路嶮岨なり行者八錫杖をたきと道を踏分け小天井大天井
を大鞍掛と云へる所より大峯を持たる二鬼踊り出て前後

より。道を坊さく曰何用有く。爰ゑ来るやと。怒る客頷ハ尋常の人ゑのごとを
丈高く。両眼光り有く。身ゑ董衣を着〜たり。行者曰く是坊主なるハ如何
なる者ぞや。鬼答く。我ハ此山ゑ住んで人肉を食ふを好めり。汝此斧下ゑ命を
捨。我腹を肥せよと。前後より擲でかゝる。行者ハ錫杖をうけく。斧をうちを
とし。走りを捕て足下ゑ踏〜き。汝等を生置バ後世まで登山の坊主なりがちち
殺べき者なれども。今より心を改め。我兄ゑ隨ひ助べ〜と曰へハ鬼ともゑ声
を發〜ヤべきるゆり。須更ゑ〜玉へと云。行者ハ鬼を去〜玉ハぢ。願ふこと
のゝバヤべ。其意よりさ免さんとゆりんバ鬼苦ゑ〜き声を〜て。願ひ
るハ我々麓の里ゑ住めり〜者なるゆ。種々の業重りて。里ゑ住るゆかなる
ぢ。山ゑ隠れ獸を食ひて命をなぐ。今一命を助け玉へ。行者を守護〜
永く霊場の守となり。後世まで。修験道を坊る者ゆとバ。斧をとゝく頭を

徴塵ゑ女さんとゝ〜。行者此誓言ゑよりて鬼の罪を免し命を助け。前後ゑ
去るの玉ゑ依之前鬼後鬼の名ゆり。此者里ゑ住し時。八人の男子ゆりまで愛を
るる。他ゑ異なり然るゑ或時嫡男病ゑ臥り。両親心を痛め双抱〜てゆりるる
廿日餘りゑして終ゑ死〜たり。両親歎きかなしむゆ限りなし。然るゑ二男
もまた病ゑかり十日餘りゑして死〜たり。それゑ半年ゑこの子七男まで死〜
當歳の男子一人のゝ殘れり。是より後ハ朝暮子のゝ愛し。農業ゑも出ず在る
がまゝ此小児も病ゑ觸さく乳房を含るゑ一口だゑも呑事を不得。両親肝を裂
胸を剥るの思ひをなし。神佛ゑ祈り我命ゑかへるを願ふと雖さらに其験も
なく。終ゑ七日ゑして死〜たり。依之近さけぶ声ハ村の中ゑ聞へて甚哀れなるゆさ
はなれハ。里人うちよりて葬式を行んと云ゑ。死骸をつぐきるくさらにたなさぢ。老
人の曰く死たる骸を愛〜留置ハ却て魂魄の迷ひとなるべ〜。速く葬りて

其霊を吊ひ玉ひ。慰撫し教へんとも。其ゝもかゝを後ゝハうち服たちて怒り白刃。是く愛しき子を捨よと。哀れをきゝぬ鬼ども。哉とさとゝ。追ひ出し。左きし。姦めし婦うち奇數き居しが。終ゝ我子の死骸を食盡しゝ。是より。狂人とゝり。唯他人の子の健ゝなるを見て。妬ましきゝ思ひて。鬼畜の心ゝぞなりゝ。然ゝ。隣家ゝ當歳の女子ありて。父母寵愛ところ。浅からぬ。養育せしを見て悪きゝ思ひ積りて。終ゝ其小児を取食ひゝ。是より山ゝ隠れ獣肉を食し。生経ゝきてゝ。幽谷ゝ入り。鬼神の如くゝなりて。正行の者を悪ゝ。既ゝ役行者を妨んとしゝ。其戒を請。積ゝ悪業を懺悔して善心を生じ。永く山上ヶ嶽の行場を守り。参詣の人々を懲し善ゝ導く事。偏ゝ行者の御威德ゝ。其住し里を前鬼の里とゝ。後世ゝ至り。本山當山何れも塞入の節。此里ゝ宿し玉ふゝ也。又曰播磨ゝ後鬼村ゝ。日光山ゝ善鬼とゝ。修験者ゝ。是ハ別傳ゝ著を見て知べし。猶も前鬼後鬼ハ斧を持先ゝ立て。山上ヶ嶽へ登り。行者ハ義覚義玄を率て。峻路を踏分玉ふ。爰ゝ高く十丈ゝ聳へたる岩ゝ。後世鐘懸岩といへるハ此所なり。是より。西の臨き岩をそぎ。巍々たる所ゝ草庵をむすんで。蔵王權現の尊像を安置し玉ふ。後ゝ行者の御遺像を副奉り。是より西ゝ。帰出岩と名づく。あゝ東北ゝ。蟻の門渡りと号し。飛石東の臨き岩行道岩屏風岩等ゝ。是より山上ヶ嶽ゝ至り。其山勢高峻なり。山頂ゝ浄殿を営く蔵王權現を安置し。夫より稲村ヶ嶽ゝ。篠普賢ヶ嶽。兒宿是より層巒疊嶂とし。山路嶮しく攀躋て。御嶽神山ゝ至り。又南方ゝ大日ヶ岳ゝ。次ゝ轉法輪ヶ岳。天狗ヶ岳。地蔵ヶ岳。東屋ヶ岳。種ヶ岳。仙ヶ岳。笠捨山。花折山。土宝岳玉置權現ゝ至り。吉野山より山上ヶ嶽至凡六里餘。又山上ヶ嶽より。御嶽神山

まぐれ六里餘。御嶽神山より玉置迄九十里餘なり。都て是を峯中と云
是の如く嶮難の山路を踏分後世までの行場を開き玉ふ。又御嶽神山に登玉ふ
時一騎の骸骨あり。其丈九尺五寸許りなり。左の手に獨股杵を執り右の手
に利劔を執て仰ぐ臥せり。行者獨股杵と劔とをとらんと玉ふに此動
けども取得ざるに叶はず。大に怪み玉ひ。此山頂に坐して。本尊に祈り玉へ。夢
中に告玉く。汝七生の前より當山に修行せり。才三生まで。岩窟を開きしに。則
三重の岩窟あり。今見る骸骨は才三生の古骨なり。劔杵を得んと思ふ。千手陀
羅尼を誦し奉て取べしと。夢さめて後教の如く千手陀羅尼を誦し
玉へ。一千遍誦し奉て。劔杵を得玉ふ。劔は角なり。長九尺なり。則降魔
の利劔と号し。是を持し玉ふ。劔を帯し君に仕へ奉を武士と云。利劔と
帯し山に在て。本尊藏王權現を守り仕方故に山武士の名あり。故因に曰

野武士野伏りなど。相似たれども。甚異なり。野武士野伏りは山賊の類ひにして
野しき武士なり。まゝ山に伏すと書も一理なれども。山武士と書は本意なむ
然れども。是は予が愚按なれば水にしがゝし。猶博識の人に問べし
行者は此利劔を義賢に傳ふ。義賢は義玄に傳ふ。義玄は義真に傳ふ。義真
は寿元に傳ふ。寿元は傳へきゝなし。依て金峯山藏王堂の秘所にうばひ後
世にいたりては。あらたなるかなとぞいへども。修驗直に劔を帯たる此古例に
よるべきなり

役行者の前生を論ずる話

並十二數來復之話

法華經普門品に曰觀世音菩薩以何因緣名觀世音佛告無盡意菩薩善
男子若有無量百千萬億衆生受諸苦惱聞是觀世音菩薩一心稱名觀

役行者
前鬼後鬼を
伏し給ふ

世音菩薩昔時觀其音声皆得解脫云云又曰觀世音菩薩成就如是功德以
種々形遊諸國土度脫衆生云云役行者七生のぜんより天竺唐土日本ハ修行
玉ふハ皆是菩薩の權化なるべし。日本神仙傳湯河之玄圓菩薩を作て曰弘法大師天竺よりハ
勝髮夫人唐土ハ慧思禪師日本ハ現じて聖德太子皆是觀音之權化
土佐室戸之縁起仏侯師曰在天竺名勝髮夫人於震旦名衡山慧思禪師於大峯
名役優婆塞於葛城名法起菩薩前生言上宮太子今世号空海とあり是等
の文よく考るに聖德太子役行者弘法大師皆觀音權化と見へたり。また
聖德太子の前生を救世觀音とハ百齋國聖明王を救世觀音の化身とハ其
子威德王父聖明王死して後戀慕やまず。救世觀音の尊像を作りて父
王如在ハ仕へ夜の夢ハ父王告玉ふ今日本ハ生れ厩戸王子と云と見て夢ハ
さめさり依之大ハ喜悅尊像を日本へ送り。聖德太子ハ奉り則四天王寺の金堂ハ

安置して手。是よりなく權化なるを知れり。觀世音菩薩ハ正法明如來なれど
も女覺の位を菩薩ハ下りて衆生を化度して母の子を愛するが如し。此故
ハ觀世音と云母として子の声を聞のり見ざるなし。是愛情のふかきをへなり
衆生を子のごとく愛して母との意ハ世の音を觀と云是を大慈大悲と
云なり。厩戸皇子ハ萬乘の御位を好ず玉ぶ。佛法を信じ。國々ハ國分寺を建
摂津ハ四天王寺を創建して六万躰の石佛を作りて地ハ法と霊場とし敬田院
施藥院療病院悲田院の四ヶ院を建まず敬田院ハ僧俗とも戒律を保ち
を置常ハ法華勝髮經を講ハしめ施藥院ハ貧者ハ薬を与ひ
療病院ハ困窮の病者を養ひ悲田院ハ鰥寡孤獨の者を置鰥とハ老て
妻なき者。寡とハ老て夫なきもの。孤とハ幼ひして父母なきもの。獨とハ老て
子なき者。是のごとく難儀の者を救ひ。禁中ハ十二階を定め玉ふ。大德小德

八品位なり。大仁小仁八五位なり大禮小禮八六位なり。大信小信八七位なり。大義義八八位なり。大智小智八初位なり。是位階のもじめなり。各衣の色をもとめ〻上下の別なり。また十七条の憲法を定め天下の政を正〻〻事。是廣大の御德なるふまへ〻聖德太子とゝなり。統中役行者の前生を聖德太子なりと室戸の縁起ふなり。是ふまへて考ふ推古天皇二十九年二月五日。聖德太子班の宮ふおわく入滅〻事。其後舒明天皇五年三月。行者の御母靈夢を蒙り懷妊事ふ閑十二年なり。都て十二の數をとるく来復とも易ふ坤の卦を十月とし〻く復の卦を十月とも。日もまた是のごと〻。東方ふ出晝の六時をもぎく。西方ふ没〻。夜の六時をもぎ。十二時ふして本の東方ふ復も。是也ふ十二因縁なり無明。行。識。名色。六入。觸。受。愛。取。有。生。老死なり。老死より無明ふ復も是車輪のごと〻。佛祖釈尊八久遠の仏なれども。人界ふ生をうけ。十九出家。三十成道と云。是難苦の行ひ十二年ふ〻く。正覺成道〻事八。佛界ふ復〻事ふなり聖德太子御入滅より。十二年ふして。役行者御誕生なり〻。また〻太子の再生〻事ふとゝなり。

役行者石橋を架んと慮り事ふ話

並韓國廣足談養之話

役行者八金峯山より。山上ヶ嶽玉置至嶮々たる。峻嵯の棧路をひらき。また金峯山より。金剛山へ往来のたゆ。石橋を架んとを慮り。鬼神天狗の類ひを駈使もべ〻と。前鬼後鬼ふ命じ事。二鬼畏く是を諸國の霊場ふ觸る。都て高峯絶嶽の所ふ八鬼神天狗の類ひもむとゝ。峻云冨士山。下野國日光山。加及白山。越中立山。上野國妙義山。紀刕高野山。山城國比叡山。同國笠置山。愛宕山。醍醐山。鞍馬山。江刕伊吹山。三上山。讃刕雲邊寺。象頭山

白峯八栗ヶ嶽。常陸國筑波山。出羽國湯殿山。遠江秋葉山。豊前國彦山。伯耆國大山。筑後國高良山。筑前國背振山。日向國霧嶋山。越後國妙香山。信濃國戸隠ヶ嶽。御嶽駒ヶ嶽。羽前羽黒山。勢州朝熊ヶ岳。土佐國足摺山。豫州石槌山。豊岡山。甲州身延山。此外諸國浪々所なく。通達よおよびけり。依之金峯山ゟ集り天狗ゟ。まづ鞍馬山僧正房。愛宕山太郎房。比良之山二郎房。伊豆奈之三郎。富士太郎。嚴島之三鬼神。上野之妙義房。常陸國筑波法印彦山之豊前房。大山之伯耆房。嚴山之法性房。肥後之阿闍梨。高雄之内供奉。白峯之相狭房。秋葉之三尺房。高野山之法性房。堺之浦之太郎房等なり。大峯ゟハ金平六。葛城ゟハ高間房。此外眷屬無量百千万なるべし。前鬼後鬼ハ。行者の命を蒙り。鬼神天狗を配し諸方の石を集。其砌々たゝへ申さまゝ。絶磯より百々とし。礎をさゞむ。是ごとくなれども。晝夜を別たず。乃時一言主之神。前鬼後鬼ゟ告玉ふく。晝の働きを止め。夜毎ゟ出て造らべと示し玉へ。二鬼畏て諸の天狗ゟ觸れ。晝ハ休て。働きをなさざりけり。行者ハ。神通自在ゟ。遅滞せバ。方のゆゝしきものを慮り玉ひて。二鬼を召て。急ぎ造らべしと。嚴しく命じ玉へバ。二鬼答へて。我々ハ。師命ゟ遠ざ粉骨の働をなせども。一言主之神。晝のたゝりきを禁じ玉まよりて。夜毎出て石を集め。暫砌を疲ぎ。霎時も懈怠なるなし。然れども。日役を待て。確々たる石を動し。東天のひゝなれバ。山林幽谷ゟ隱れ。空しく。終日を待故ゟ遅々ゟ及ぶ。是のごとく罪なきを免し。遅滞の由ハ。一言主之神ゟ申へと願ふ。行者ハ直ゟ。一言主之神ゟ閲し。晝の働を禁じ玉ハ何故ぞや。遅々ゟ及ぶ方のゆゝしを遠察し。心易のゝ。ぞと曰へバ。一言主神面を隱し。こゝへ。晝中を禁ぜるゝ。石槌を忌嫌ゟ。ゆゝ。我容貌の醜くきを恥なれバ。行

者かなくむ。うとみ玉ひそと侘言す。行者ハ地主神の詞。もだせ〳〵と。咎き玉へど女神の御心を遠慮しく。晝の働きを禁じ。夜毎に播を造りまつり成就なくむ。しく。誤者の舌頭にかゝりまつる。行者の遠察なし。もとハ是を神通力と云なく。爰に韓國廣足と云ものあり。佞奸邪智の癖者なり行者いまゞ。葛原郷に居し。玉とき。呪験を顕ハし。上下尊卑の差別なく。死苦。生苦。病苦の難をとくゐ。或ハ怨憎會苦。まゝハ怨霊の祟。諸の災害を除き玉へり。神の如し。依之諸人尊敬もとろ。かぎりなし。廣足ハ貪欲の心いくまで深く。今役行者を敬ひ。種々の珍物奇者を持運び。群集しけるを見く。我身も行者の如く人の敬ひを請。多くの財宝を獲バやと。欲心を發し茅原の里に行く。行者に辨閲し。佞辨を振ひ諂〳〵曰く。行者の呪験神の如し。天下に敬せざるハなし。我常に尊信をとろへ。淺ましく。今此里に来

佛門に入く。呪術をさつこのくるをを。免しく優婆塞の行ひを傳へ玉へと願ひ。行者ハ廣足が邪佞の詞を聞。心中の謀畧を見貫き。悪むべき者なんど。如是悪人を化度せバ。廣大の功德なりんと。謀り玉ひく。汝今より改しと怠りなゝの人と。優婆塞行を傳へ玉へ。先優婆塞の行ひとハ在家出家通ず。頂髪を殘を而已にく。餘ハ皆比丘僧の威儀の如く。次に八五事を断ぜべし。一に八肉食。二に八五辛。三に八飲酒。四に八婬欲。五に八不淨の家に食せど。如是して潔齋精進なへし。是嚴密に戒慎せバ妻子を帯ととも。悉地成就なるべしと。しへ玉へバ。廣足ハ謹ぐ行者に乞ておゐ戒を保ち優婆塞行を怠りなく勤ること三百日に及ぶと雖も。未だ驗を見ぜまゝ。秘文秘印の傳へなきを。深く恨む。時行者の前に頭を下。戒を保ち。師に仕ること。三百餘日なり。何とく呪術を。傳へ玉ハさゝ。故と云。行者曰く。女肉食を禁し。婦女に不近。奇。不淨の家に不行。優婆塞

行ふに似たりとも心に戒を不保。衆生を救ふ心なく。我立身を願ふ。是邪佞の心より。咒術を傳ふとも。其験をあらはすことかたし。咒験を顕し諸人を助けんと思ふ心深く優婆塞の行ひなるべしと。廣足が五臓六腑を見めぐらしごとく嚴戒を下し玉へ。廣足是を深く怒り。直に茅原郷を退。行者を誹謗し種種の妨をなすと雖も。廣足の詞を信ずるのみなり。益益入まして。深山幽谷に分入。靈場をひらき玉ふ。其功徳廣大無量なり。廣足瞋恚止時なし。然に今石橋を架んと。一王子を知り。是を種として。行者を罪におとさんを謀誅しと曰。役行者ハ深山魔所の幽谷に籠り。不思議の邪法を熟煉し。通力自在にして。飛行の身となり。鬼神を駆使し。諸國の天狗を集め。葛城の峯に籠り。天位を傾け。神國を魔界にせんと企る。速く征罰なくんハ。天下の乱きとなるべしと。奏聞におよびけり。諸猟驚き玉へども。役小角ハ正行の聞へ有り。實否を糺さんハ容易に参し難し。仍葛城に行く。小角を連きたるべしと命じ玉へハ。廣足畏て。直兵を撰て五十人を率ひて。葛城の峯に登り。勅命の御使なりと。威を振ひ尋ねといへども。行者の在所を知らず。是ハ行者神通力をもつて。廣足の来りを知り。悪むべき者なれども。勅命といへハ背難く。まゝ因となりん謂れなしと。摂及箕の西山へ飛去り玉ふ。依之廣足尋得ざる難し。前鬼後鬼ハ行者に随ひ去り。其外鬼神天狗の類ひハ皆幽冥の者にして。凡眼に見ざる叶ハず。廣足怒れる眼に血を灑ぎ。峯に攀躋り谷に下り。千變万化して東西に奔走し。尋ぬ三日三夜にして。道をしるべき踏まよはず。北に向ハ嶮々として。登るべき道なし。また南方に温めハ嶮深く進み難き。東に行ハ茫々として。踏分難し。また西に行んとすれハ。松柏森々として道路絶たり。生

役行者御伝記圖會卷之下
十二
鬼神を駈使
岩橋を
架んと

從五十人進退此所ゑ極り。まゝ糧盡て既ゑ餓ゑ悩め。尓時從者詞をそろへく勇猛精進なり。役行者を攻んるハ仏の御意ゑかなへぢ。金剛藏王權現の罰ならん。皆一同ゑ神佛ゑ侘言しく。遂ゐ道を得ぢんハ。山中ゑ餓死ぢし。速權現を祈んと、ゆ。韓國廣足大ゑ怒り。下知しく曰く。昔より戰場ゑ深入て。道をうしなわ〜例しもなり。其時陳中一の老馬を放ゝハ本來〜道ゑかへると、いゆ。幸い我乘馬ハ。老馬なり。嶮路を登ゐ足ざりしが。却て今ハ事足りなんと。馬より下りて口を取輪をめぐらせる。三度まして。一鞭ゐくけるゑ。馬ハ忽ち驅ぐし。其速きゐる飛鳥も及べからぢ。既ゑ也ぐゝを見うしなゝとぢ。依之廣足をとゞめ。從者殘らぢ。嶮路を志のゐで。奔走ゐる。凡十餘丁ゑて。やうく迫ぢさるゐ。此時馬ハ何驚けん。騏ゐのりて。遥の溪間ゑ顛びおち。微塵ゑなりて。もぐゝハ見へぢ道ゐるべゑ放て馬の道なき方へ行しゐる。不思議なりと。大膽不敵の廣足

仰天〜須更詞なし。依之皆々奇異のおもひをなせり。不思議なるかゝ怨山中鳴動して。大山も崩るゝごとゐり。俄ゑ空ゐのき曇り闇きゐる墨を流ぢゞ如く。其中ゑ声ゐりて。イカニ廣足女ゞ舌頭を振ひ。罪なき行者と。讒言して主上を迷し奉り。勅使と号して。當山ゑ来らとも。行者ハ神通自在ゑして飛去り玉ふなり。廣足ぢき凡夫の及ゐゑゐらぢ。例せバ蟾蜍ゞ斧。猿猴ゞ月と云べし。今ゑ思ひ知らせんと、いゆ。從者是を聞て恐れ畏る。魂を天邊ゑ飛し。身ハ地上ゑ臥り。廣足忿怒の相をゐのりて。虛空を白眼で曰。役小角謀叛の企をたゝをる。獻聞ゑ達し。其罪を糺明せんとの勅使なり。悪鬼外道の知るゑゐらぢと。云詞の終ざるに。數千悪鬼虛空ゑ顕き出る。其相〜ばれも異形ゑして。各鉾をゆち。或ハ鐵鋌斧などとぢ〜かざして。ゆゝと又〜ゞ幽ゑして見定ゞく皆夢の如し。且醉んゞ如く足の蹠呼とえへぢ。此時山頂より。烈風起つく

石を飛し大木を吹倒したり。廣足をたゞめ。從者殘ず岩角ゝとりたくゝ
へども力かなはぬ。幽谷ゝ吹おとされたる。塵をちらふが如くなり。五十餘人ハ
志ぢらく悶絶して居りしが。俄夢の覺るが如くおきあがり。辛ゝして幽谷を
逃れいでぬ。皆再生のおもおとなり。君臣上下の礼をたてさんくゝよりて郡ゝ
かゝりる。乞爲の不思議ハ皆。天狗のなせる業なる歟。後世といへども。山上ヶ嶽へ
參詣の輩。身ゝ不淨或心ゝ悪謀を企の者必嚴戒を蒙り。鐘懸岩臨岩ゝ
どの。絶嶮の行場ゝ至る。多年の積悪を懺悔し。潔齋精進の身となる人多し
是皆行者の方便なり。畏るべし　尊むべし

廣足謀て行者の母公を可責とる話

並行者大嶋遠流の話

韓國廣足行者の行方を志ゝとゞ。剩へ幽谷ゝおいかとされ辛ゝして逃れ
歸りられバ。怒れる心日ゝ日ゝ百倍し。種々ゝ謀を按じ。行者を罪ゝ陷しいれんゝ
を企りる。廣足參内して。返り言を申て曰く。役小角ハ邪法を行ひ飛行自在の
身となり。諸の眷屬悪鬼外道を師く。虚空を踏ぐ。葛城の峯をとび去
其影を隱せ。是違勅の罪免々ゝ虚なり。早くゝ召捕て斬ざんバ。斧を用ゆる
とも。ゝるべしと奏しれる。依之諸卿驚きゝひ八方へ兵を配る。たゞ勢ゝ
る。既ゝ五十日ゝ及ぶとゝへども。其在所をゝ知ゝず。諸卿評しゝひよも唐土天竺へ
も飛去ずと。猶人數を增て。東西ゝ奔走し。南北ゝ巡回せんども。尋るゝとゝきま摸
索ゝ其西山ゝ在ゝ。告来の者ゝ居り。直ゝ是を奏聞奉しけり。文武天皇叡慮を腦
しゝ勅使を。急ぎゝ角を追捕せべきよし。勅を下しゝ。廣足ハ恨をちらきん爲
勅使をも詣しんバ。則御免しを蒙り。百人の兵を撰ゝ。其西山へ急ぎりる。猶行者
葛城の峯を飛去り。當山ゝ来て行ひゝ。然りゝ。神通力をもちゝ。今又勅使廣

足の末ゐを志ろしめ。龍の上ゑ登り石上ゑ座し。前ゐ石ゑ錫杖を建くまち詰ゑ。廣足兵を駈しく。其西ゑ至り。所々を尋ゆそれより。龍の上ゑ蹲りて行者の名上ゑ座しゑを見く。大ゑ怒く曰く。兵葛城の峯ゑ鬼神を集め。神國を驚畏ゑもし。天位を奪んと企ゐ由。叡聞ゑ達も。依ゑ其罪糺明の爲。宮中ゑ召よせべき旨。勅命を下さる。則勅使葛城ゑ登山さとゝ。邪法を行ひ當山ゑ飛來して隠々ゐる。帝逆鱗ゐつく。急ぎ追捕せべしとゝ。嚴命を蒙り廣足羅り向ふたり。召捕て刑罰を正しうせんと下知を傳へりれば。兵ども行者の前後左右より。立ゐらんとせ。行者ゑ動じゐ。廣足ゑ向ひく曰く。我葛城ゑ在く。謀叛の企更ゑ覚なし。又當山ゑ我開きし。天竺ゑ此所ゑ在く疑ひをゐゑ。いとまゐ。其詞のいまゞ終ざるゑ。廣足高声ゑよばりて曰く。汝謀叛の企く覚なしとゝ。是ゑ。廣足が詞ゑ。皆勅命なり

背ば違勅の罪逃れ難しとゝ。行者答へく。我ハ仙家ゑ入く。幽冥の者ゑ同じゐゑ。違勅の罪を蒙ん。廣足の曰く。仙家ゑ入とも王土ゑ在て。ハ違勅の罪免れがゝし。未煉の應對を止て。速く罪ゑ伏せよとゝ。此時行者。身を飜前ゑ立たる錫杖の上ゑ座しゐゑ。廣足心中ゑ驚きなゞら。難じて曰く。杖下王土ゑ居らぬぞや。行者忽錫杖をとりく。空中ゑ座して曰く。勅命と背ゑ居らぬ。然れども汝ゑ囚とゐらんこと。謂れなし。虚空を踏で飛去り廣足天を仰ひで須更詞なし。今ハ行者のさゞくを見うしなひ力及ぬ。ひゐゑく坂を下らるゝ半腹ゑ至る。ゑ時龍の底より黒龍顕れ出。鹿の角を振立。鷲ゑ似たる爪をいのゝせ。追来るゝ烈風の如し。廣足をとゞめ從者是を見て恐しきゝる限りなし。足を空ゑして走ゞし。坂の半より顛落ゑ足を挫ゞ或ハ面を破りさんぐゑ成て逐りる。是よりゝて。いく廣足

意恨山の如くよりて、一の悪計を設け。急ぎ宮中より今。箕面山の垢末を去りて曰く。小角邪法を熟煉し。飛行自在なりて中く召捕る難し。依之一計をめぐらし。小角が母を召捕り。禁獄に繫ぐ。彼常に孝心なる人自出来んべし。若隠々とも。母を人質とせば。彼が謀叛空しからべし。たなくば如何なる變事をや發せんもこしも。猶豫いるべしとぞ奏しける。依之諸卿殿上に評し給へ。廣足が謀畧にしたがふべき旨を免し給へば。廣足畏て。兵士三十人を率ひこの茅原の里へと急ぎける。扨も行者の御母八年遺像を愛し居る所へ方より高声に白曰。小角謀叛を企る事露顕に及び追人を差向らるゝ。とぞ。飛去て影を隠せ。依て母を召捕て。行者の行方を糺明せべしとの。勅命なりと。左右より立のりられば。母公八歎有無のいとまもなく歎きゐを。廣足下知して籠輿にかきの据。都に送り奏聞に及び

武士に命じ。行者の母公を引出し。小角の在所を母子の中にて糺ぜるに八つるまじと責問る。母公答玉ハく。小角八我子なれども。年三十二歳より家を捨て葛城の峯に入てより以来。年積て三十五年に及べども。一度も家に還らず。今に戀慕止難く。遺像を我子と思ひ朝暮愛し。まことの小角八死生の不ども志ゝぜしてゐるを。ゆゝしきものゝ尋ねの悲しさよと。卧顛び。悲歎の紅涙に沈ミ。此時母公の御年八十四歳とぞ聞へる。流石強気の兵も。袂を絞ていのへる。廣足下知して法例の通り。七十餘度の呵責に行へ。母公問絶しぬる。數度に及べり。依之獄屋に繫ぎ兵をして嚴しく守らしむ。行者八神通力を以て。母公のなゝ三を去らしめ箕面山より虚空を奉走て宮中に入。役優婆塞行者小角参内をと聞られば。諸卿一統其神通を恐れ。且八感じ。行者曰く。身に罪なしと雖も

母を救んゐ子まゐる。願くハ我身刑を蒙ん。母を免し給へと願ひ奉る。依之孝心の
かるゝきを。奏聞ゐ奉り。小角の母を。葛原の里へかへし。小角八豆刄大嶋へ配
流ゝ。べしと定め給ふ。依之母を葛原の里へかへ遣し。今度葛城の
峯ゐ。鬼神を集め。謀叛を企。猶飛行の術を行ひ。勅命を背き。身を隠
す事。其罪軽からぬ。依之豆刄大嶋へ流し給ふ。勅命のかるゝきを
仰渡されゐる。行者畏て曰く謀叛の企さらに無し。葛城の峯ゐ在て。幽冥の者
を駈使ハ謀叛ゐ。いかゝ。金剛山金峯山の間ゐ。石橋を架。後世ゐ伝へ
参詣の苦を助んゐ為なり。小角幼きより。優婆塞の行ひを。常ゐ孔雀明
王の咒を持誦し。家を捨山ゐ入ハ一切衆生を化度せん事を願ふのミなり
何ぞ謀叛の企あるべきや。又其必前内府鎌足難治の病ひゐ臥ス。醫療を
加へ。神社佛閣ゐ。祈念せらるゝ。虽も。さらに其験なし。既ゐ命終ゐ及んとす

其時齋明天皇の勅命を蒙り。咒力を行ふ。三七日ゐ至て。病苦を救ゐ
依之参内を免さん。高位を賜ゐ。内勅を蒙ゐ。高位高官ゐ
望ゐ。故ゐ深く辞して。猶我咒験の功を。百齋の法明ゐ譲り。出家せ
を。とゝ。身の榮花を好ざゐ。知り玉べきゐにあらざるや。然ゐ今詔
言を信じ。罪なきを遠嶋ゐ配し給ふ。政道たゞしからぬ。我ハ行の功成
就して神通力を得。飛行自在の身となれり。如何ゐ遠嶋ゐ配せらるゝ
さらに苦ハなし。然りといへども。是の如く詔を信じ。無罪の罰を加へ給ふ天下の
乱基とならん。伏願くハ詔者を退け。賞罰を平く。仁政を不ど行ハ
悼歎なく述ゐ。諸卿額ゐ行を。なゐ。口を閉て。ひの入ゐ。然れども詔ゐ逆ひ
罪を決して。奏聞ゐ及び。ゐ。容易ゐ變じ難く。是兆の乱明ゐも及ぶ遠
流の仮休まりぬ。尓時行者御年六十六歳なり。文武天皇三年二月十日

廣足金剛山に登りて鬼神のいましめよ

都と出く。伊豆國へおもむきまゐ。遠路を守りし兵士五十人其嚴重なるゆ
さまゑ。うくん朝歆のごとし。日を累く。豆函よりくり。下田浦より乘船し。海上
長閑よして。風波の難もなく。大島ゑ着岸を。行者陸ゑのぼりあひ。磯辺ゑ
一つの石なるを見あひて。其石ゑ座して。秘咒を持誦しまゐ。後世此石を腰うけ
石と号し。流人此石ゑ座して。島の條目を。ゆるすとハまゐりとこのや

廣足神罰を蒙り死亡行者歸俗之話

並行者唐土へ飛行の話

抑大島といふハ。人皇六代孝安天皇の御宇開闢しより。數百年の後
ゑてより。漸々ゑ人住と云へり。伊豆國ゑ屬し。加茂郡下田浦より。東南ゑ
向ひ。海上十八里を隔。廣きこと。東西二里半。南北五里ゑ餘れり。此外ゑ
小島あり。伊島。利島。相島。新島。山伯島。志貴根島。神集島。宅島

御藏島等なり。是より南方遥ゑ海上を隔ハ丈島あり。如是小島多きゆへゑ
大島の名なる故。開闢ハ來千餘年の星霜を輕といへども。糧乏しきゆへ。住
人いまゝ稀ゑして。一食よして命を續ぐといへり。かゝる難所といへども。行者安
しゝ厭ひたまハず。晝ハ島ゑ在て。秘咒を持誦して禁を守り。夜ハ必ず富士の
峯ゑ登り。龍樹菩薩ゑさづけのまふ。真言の密法を行ひ。黎明ゑおよんで嶋
ゑ歸りまふ。海を踏で走るの。陸を行ゲ如し。まゝその速きこと。飛鳥も及べのゝ
ず。行者ハ幼年より。四天王天蓋を持て。守護しまゆへ。雨衣を濕さず。今ハ通力
自在の神仙なるゑよりて。雲を踏風ゑ乘じまゑ。風雨ハさゝに屋ひまゑハずこれ
ゑよりて。一日の懈怠もなく。富士の高根ゑ通ひまゝる。既ゑ其年も暮れ明れ。文武
天皇の四年とぞなれり。母公ハ呵責と免れ。茅原の里ゑのゝり。行者のゝ
のゝ按じ煩ひまゑしゝゑ。豆函大嶋へ配流せらるゝと。聞まゑしより。悲

歎ヲ臥し。終ヲ病根とハなんり。年月を累令ハ重き病と成ハなりける。行者ハ神通力をとろて。母公の病ヲ臥ヲ起をまろしめ。茅原の里ヲ飛來し。母公の枕邊ヲ去ずして仆抱して仕へ奉ル。種々ヲ心を配て。老の病苦を慰え奉ることハ老来子も及べ〻ハ。然りとハいへども。勅勘の身の上なれバ。他聞を憚り。朝ハ嶋ヲ遂り。夕ハ里ヲ来て。母公の御傍を離れず。慰勤ヲ尽をのゝ居る。ハ時文武天皇五年の春となりて。天武天皇の朱鳥ハ未持統天皇の御世十一年。富今の御世五年。今して十六年の間。中絶たる年号を始て立て大寶と号ス。是より大宝元年と号ス。爰ヲ韓國廣足讒言をかまへ。行者を遠流の罪ヲ陷るとハいへども。飛行自在の神仙なれバ。廣足心易〻ハ。流罪ヲ行ひ難し。後嶋の行狀を。窺んとすれども。遠の海上を隔たれバ。力及ハず。依之茅原の里へ問者を遣ハせ。母の安否を窺せける。然るヲ。行者ハ孝心淺〻ハず。夜毎ヲ母のもとヲ来り仕へ奉る。年月を累るも。終ヲ里人是を知て。大ヲ惑ひ。且其神通を畏れ。謗るヲハ〻〻〻〻。竊ヲ語りあひしるを。間者ども聞へれバ。よきるに如ものく。是を告られバ。廣足大ヲ驚き。間者ヲ保美して。まゝ茅原の里へ走のバせ。其身ハ急ぎ參内して奏聞し奉ル。役小角通力自在ヲして。勅命を軽ず晝ハ大嶋ヲ在といへども。夜ハ高峯絶嶮の地ヲ飛來し。鬼魔の類ひを集め。惡計をめぐらし。或時ハ茅原のさとに來て。母ヲ伺ひ。訴ん者ヲ。實ヲ謀叛の望なき者ヲ〻〻。勅命を畏て。嶋ヲ慎まるべきヲ。自在ヲ飛來し。宮中を義ヲとろ〻。言語同断重罪免れがたし。生置ハ災の種を植るが如し。速く死罪ヲ行ふべしと。讒言ヲなすべ〻る。諸卿一統廣足が佞辯ヲまゝ〻。いのちの變事ヲや及ばんと。大ヲ周章此ヲ。敵聞ヲ逆し。ゆへハ。帝大ヲ逆鱗し。ひと速小角を誅戮せべしと。勅を下し。依之急ぎ。大島へ勅使をたつのりさら

昂勅使兵を駈て大島へ流り。行者を召キ。勅命を伝達て其詞ヨ曰く。遠流の制禁を破り。自在ヨ飛行。悪計を企るのよ。叡聞ヨ達て。依之殺刀を下さるとなり。行者答ヒく。悪計を大ヒ行ヒ。富の高峯ヨ登ヒ。天下泰平を祈又母の病ヒるを看ヒく。茅原の里ヨ行事。遠流の制禁を破ヨ似たれども。曾て破ヒ。夕べヨ行ヒく朝ヨ帰り。晝八島ヨ在り。是制禁を守ヒ。然りと雖讒を信ヒ。糺明もなく。死を宣ヒ。仁慈ヨ使たりと。いへども。天命なんぞ辞ヒるを得んと。速ヨ座ヒ。頭をのべく殺刀を待ヒ。勅使下知を傳へ。太刀とりの者行者の後ヨ立まゐり。既ヨ太刀をひげんとして。忽ち眼闕へぐ顛倒ス。勅使大ヒ怒ヒく太刀とりの者をこのヒしむ。則太刀をとりく立ニのり。同く眼くらこて屍君ヨ臥ス。又代りて。進ス奇ヒもの。同く太刀をとりなとし。断るのるこるを是のごとくなるへ。三度ヨ及るといへども。殺るのるこるを。勅使をハドるへ皆一統ヒ

奇異のかもひをなし。急ぎ帰洛ヒ。不思議のよ。と見ヨ奏聞ヨおよびれハ帝をもヒ。免奉り。一統大ヨ驚ヒ。猶おなしめを旨ヒて。行者ヨ殺刀を下さんとせ。時日を尋ヒ。則十月二十五日の上刻より。勅答奉る。依之いよく不審ヨ思召るのり。勅使都を出立の日より。韓國廣足病ヨ臥ヒ。二十五日の上刻病中の夢ヨ。四天王鉾を持て天降り。廣足を責て曰。豆刀大鳴よ。なるく役行者今既ヨ殺刀を蒙んとす。是皆女ヒ讒言ヨ。罪なヒく。罪なヒく。急きヨ臨む。とへども。諸天善神行者を哀れを助く。女ヒ罪を責ヒ。のみくと鉾をのげて擲ヒ。廣足おとろきさるる限りよ。其苦脳ヨたへ。ひ。声を發ヒ。叫ん家内の者ヒ。ちよりて。父抱ス。依之喪ヒ。たれども。五躰崩々ヒ如ヒて。九死一生の病となれり。是同日同刻ヒるる。仁審ヒ。方ヒより。かよりを。神仏の冥慮ヒるべ。ヒれより。廣足七書夜の苦ヒ。無間地獄の呵

責も是のゝんと思ふたのゝまゝて。終ゝ死ゝたり。帝御心易のゝまと思召博士ゝ
命ゝ占はせ給ふ。則謹でトゝして勘文を奉る。其詞ゝ曰く。天皇宜欽崇ゝ
べゝ。是凡人ゝのゝらむ。大聖人なり速ゝ免ゝ。都ゝ迎へ尊重供養ゝて心ゝ
まゝのせゝべゝと。依之小角謀叛を企ゝ欲。廣足ゝ讒言なる欲決ゝがゝく
叡慮を驚ゝ給ふ。乎時諸卿一同ゝ奏ゝ申ゝ母を宮中ゝ召なのれそ
後小角を免ゝ玉べゝ。若小角悪謀を企ゝるのゝらば。其時母を嚴ゝく責
て小角を懲ゝ玉へとなり。是ゝ一決ゝて直ゝ。茅原の郷より行者の母を召寄
給ひり。爰ゝ一ゝの御疑ひなり。小角ハ母なれども。父の名を知る者なゝ。何者の
子なるぞ。尋問べゝと勅命を蒙り。則老母を召て小角の父ハ何人なてのりし
哉と尋給へバ老母答ゝ給ハ。或時一ゝの獨股杵天降りて口中ゝ入と夢見てより孕
ゝ給へ父ハなゝとやゝ給ひりれバ。弥々疑ひの里。是必偽りなゝ。西親夢見て

孕とハ名欲まゝ給ハ。夫ゝのりて夢見てたゝめりと云ハ。權化とも云べきなれども。夫
なゝく孕ゝと云。深き謂吉ゝのゝく拙きなゝと。強て問給ふ。老母答ゝく。白
地ゝハやがゝ免ゝ給へと。のりれバ。猶々免ゝ難ゝとて。責とひれる。老母其
苦腦ゝたへかゝ。ねきなり。須更なゝ。歎き給ふ。依之其咎責を為る免
れバ。老母謹で曰く。母のゝく父なきなる疑ふも。道理なれど。憚るゝのりて慎
ゝ。勅問とのれバ辞ゝがゝ。恐れなゝ中ゝ上ゝ。若のりしとき。弥生なのゝ
の中ゝ。そのりし。舒明天皇茅原の里ゝ行幸ゝ給ふ。鷹を放ちて御遊の
りし。其時俄ゝ雨降ゝけれバ。我館ゝ入御のり。猶湯とめゝ給へとハ。父ハ
無位無官の身ゝて。玉座近く參ると恐。妾ゝて湯を奉りる。妾ハ拙
なれども。御心ゝかなのゝや。其時唯一度の恩幸を蒙りし。それより常なゝ
身ゝなりる。御胤なりと。披露せんゝ恐れのる。天より獨股杵下りしと

偽り月満て男子をうめり。ニーき天子の御落胤なれども。賤の女の胎よりどりの一ぬ。四丈のうちに入るるの。甚悲しくてありりんども。君の御名を穢し奉ることの恐れ多く。六十九年の其間只外へ。つぐさぐりーゞ。今日勅命の御尋辞とるるかなバ。奏ーー奉りなりと。具に述べ。是を聞大ひに驚夢の覚たる如く急ぎ此よーを。奏ーー奉りる。文武天皇不容易るなりと。慮をめぐらしまよ。今度博士の勘文。大聖人なりとありーハ。此故なる欲されバ。廣足ゞ讒言ふてありーーと。行者の御疑ひ晴れ。急ぎ老母を。茅原の里よこへーー。速く小角をめーのくー。罪なきよーーとヤをバーーと。命じ玉へハ一同に畏て。直に老母を送りのくー。大島へ勅使を差向とる。勅使ハ急ぎ都を立て。豆多に着ー。須風を待て嶋に渡海ー。行者を尋ね。邊に見へず。山中に分け入りんバ。行者ハ石上に座して。秘咒を持誦ー玉ふ。勅使是を見畏て。進奇ぬ。ふ時行者ハ神通力をもて。勅免の御使なるるを知ーめー。石室を下りて迎へ。勅使ハ礼をはし。勅命を達す。其詞に曰く。廣足ゞ讒言なるるを。弘ん。行者の流罪赦免ー。とあり。りんバ。行者謹で勅免を蒙り。則勅使と同船ー。纜を解ひく。加茂郡に渡り。日を経て帰洛ー。勅使ハ行者の徳の高きを奏ー奉る。文武天皇行者の神通自在なるを。感慨浅ーーぬ。参内を免ー。といへども。行者ハ安く是を辞ー。ひ。茅原のさとにのゝて。母に対ふ。是より後ハ天下一統行者を尊敬とるるふ前に百倍せり。文武天皇御心易ーーぬ。詔明天皇の御落胤と云。ことに正行の役小角を。廣足ゞ讒言に迷ハさん。罪なきを遠流せー事ゞ不徳なり。速く小角を召奇べーと命じ。ハ早々茅原の里に行て勅命を達と。いへども。行者元来官位昇進望ミなー。依之畏りんども。勅命を辞とるへ。末世の衆生を化度せんを願ふのみなり。免ー玉へと。安く辞ー玉ふ

韓國廣足
箕面山に登
嶽戒をなむる

此故に勅使かよバせ都よりかへり此よしを奏し奉りしに。文武天皇いよ〳〵行者の德を感じ給ひて。再勅使をたのまされしに。行者ハ神通力をもつて。勅使の來を知り。再三の勅命を蒙ハ辭し難しと。母公とともに。箕面山へ隱れ玉ふ。勅使ハ是を尋ねんとせど。草原に行く尋ねに。行者ハ見へず。大に驚里人を召て問給へバ。老父も詞をそろへ。行者ハ飛行自在にして。たゞくの知るにのゝしる。然れども。是按ずに。其〳〵の山へ行ぬ人ならんと。いへり。勅使むなしく。直に箕面山へ急ぎ玉ふ。行者ハ是を志ろしめし。此後ハ入唐せんとを發心して。まづ德善大王の社前に。入唐の意を啓し。王ハ大王別離をおしみ給ふ。社内より猛火さかんに燃出る。時行者。一度咒し。王ハ。忽に消うせしに。是より行者ハ草座に母公を鉢に座せしめ。大唐國へ飛去り玉ふ。却説勅使ハ箕面山に登りゐへど。飛行し給ひ後なるゆへ。弥ちかゝよバせど。是の通り奏し奉れバ。帝も御心殘りに。思召しるとなむ。因に曰道照和尚入唐して。所々の靈地を須礼し。新羅寺に住し。法華經を講讃せ。神仙多く來りて聽聞せる。中に第三の神仙和國の詞をうるく。論議を發せ。道照和尚問て曰。本國の詞を以て疑ひを窒ハ誰人なるや。答て曰日本國役優婆塞行者なりと。和尚則座を下て本國の事を語りけ。行者曰く我此土に來て住といへども。年毎に本國に往來し。三ツの峯に練行せ。是本國の恩を忘れざる故なりと。是を聞て道照涙を流しけるといへり。按ずに三ツの峯とハ。金剛山。金峯山。富士山なるべし。文武天皇大宝元年行者御年。六十八歳にて唐土へ飛行し給ひ。今千百五十年の後世といへども。日本に往來し。信心堅固の所に八靈驗をのゝ見し。神變大菩薩の御威德。尊ときことなむなりける

附録

吉野山千本櫻の話

並楠正成侯武徳之話

吉野山千本の櫻と、八方八峯々谷々ゑこちくてぴとめゑ見る哉の句ハたぐひよきなぐの名ゑて。雅俗ゑ通じ。貴賤のへゞてトかくぱい散際のさみやのあるをも。て。花の主とも、へり又種々乃花ありて。紅ひのゝろをたのゝ。童蒙の眼をよろこ㐌むと、へども。散ぎゑの甚拙きもゑ。人ハ武士花ハさくらと。賞美して吉きゝに。為てこと。やゝ櫻をめくたり神。ゑて其の中。その憂りれは。かくよゝし。深きこゝろのゆるゑゑゑなむ。その櫻ゑまさら楠侯の。此山ゑ皇君を迎ゑ。なゑも。皆役行者の廟威徳なれバとて。帝ゑ公のくよろこびゑひ。ゆくの櫻を植させ。永く權現へのゑ向とし。ゑ。その由来を尋ゑ人。皇九十五代の帝。後醍醐天皇と申奉ゑハ。萩原院の文保三年ゑ御位ゑ即ゑひ。文保を改めて。元應と号し。ゑゑ。尓時鎌倉八十代將軍。守邦親王なり。執權北條相狩守高時ハ。時政より九代ゑゑつゝ。武威を耀し。奢ゑ長じ。天子を始め奉り。將軍家をも蔑ゑ。依之秋田城之介時顕諫言再三ゑ及ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。長崎入道圓喜同新左衛門高資なゝ。ゝ。侯臣を愛し。我意ゑ募り。天下の政を擅ゑ。長崎父子ハ。上ゑ諂ひ下を掠め。傍若無人の振舞ゑり。尓時後醍醐天皇の御子。恒良親王ゑ。東宮ゑ立ゑのよし。鎌倉へ宣旨を下さる。高時是を違背して。後二条院の御子。邦良親王を。東宮ゑ進め奉り。餘ハ是ゑ須ひ。宮中のゝゝとゝへゝ。部て鎌倉のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。帝是をふゝく思ませゑ。万里小路中納言藤房卿。日野中納言資朝卿。二条中將為明卿。右少弁俊基卿。土岐左近頼員。其外五三人を召て北条高時を亡さんを密計ゑ久ゝ。山門寺門南都十津川熊野三の山の。荒法師を招き。其後諸國の武士を。召奇しゝ。ゝ。ゝ。然ゑゑ土岐左近頼員ハ鎌倉の威勢ゑ恐れ六波羅へ忍び行。常盤駿何守へ密通ゑ及ひ。駿何守ゑゝ。

兵に命じ。直に日野中納言資朝卿。右少弁俊基卿。二条中將為明卿を。搦め捕て。鎌倉へおくり。密計のおもむきを訴へ。高時大に怒て密計の始末を問と、へども。三卿口を閉てさらに答へ申ざ。高時忿怒して。左右を見まわし。長崎新左衛門高資に命じ。下郎の手に渡し。強問に及べしとぞ。きびしく下知を傳へ。高資元来礼儀を弁へぬ田舎武士。ことに佞肝の癖者なれば。高時の下知に。あらずんば。三卿を庭上に下し。下郎に命じ。責問と、へども。一言も發ざ。二条中將為明卿。やうく詞をつゝしてかもひきやとゞのしき。侍の。道おろそかに。憂世のうをとゝる。あきとは是よみたまへども。其意を弁ぜざ者もなく。猶々をよく。責問りこそ哀れなり。秋田城之介時顕是を聞。大に驚き高時を諫て。へらく。高位の貴人を下郎の手に下し。何責をとるべきの外のうなりまく。東八庚に。和哥の心も。弁へざる放と誘りさうくるる。北条家の恥に成べし。速く免し給へと。席をうけて諫れば。是非なく責を免して。獄屋に繋ぎ置。却説都に。三卿の囚れとなり給ふよ。大に騒動し。敵聞に達しりるや。御心を脳し。種々に評ずれども。何れも力なし。唯密計の洩聞んをのゝ。労しまひり。爰に万里小路藤房卿。鎌倉に下向して。高時に理解して。三人の囚れを救ひ奉らんと。進くゝ願ふべ帝をたゞめ諸卿一紙。発きるに。思召けれども。藤房卿。去ぬて願へ。急ぎ鎌倉へ下向し。日を累て。鎌倉に着し。宣旨の御使なりとて。高時聞えく。武威をもつて。取挫んを謀り。旅館に休息を進め置。對面の用意を專にせ。書院の上座に。勅使の席を設け。自ら座に。北条高時。次に。長崎入道圓喜。同新左衛門高資。秋田城之介時顕。其外一門三十八人。武士三百六十人列座し。旅館へ迎ひをたのしりる。万里小路中納言藤房卿。早速に登城し。席に進み。左右列座の武士。肩を並べ。

重ひのたり。藤房卿ハ上座ニなり。勅命のおもむきヤ度人。謹で拝聞ありべしと
勅書を捧げ。仰度さ〻ハ今度鎌倉へ召下セ三人ハ。皆殺上人なり。奏聞よりおよび武
威をとろ〻召捕々。天位を恐れざるものなり。速ニ送りかへすべしとの。勅命や
とりりんハ。高時をこゝも恐るゝいろなく。疑ハしきゆゑ有子よりく。召捕て尋聞
ふなり。是皆天下泰平の為なり。天下の政道ハ奏聞よりおよび。鎌倉よりおこなく。執
たるのゝ上なり。高時の私ニのゝ。後白川院より。頼朝将軍へ六十余ヵ条怠慢輔使た
らべしと。政事を預け平氏なり。されハ今。高時のたのゝしひを。妨げ。ハ先帝の勅定
を破りて。平の理ニのゝ。藤房卿曰く。疑ハしきゆゑハ。奏聞よりおよび。糺明ありべき
なり。後白川院より。頼朝将軍へ。怠慢輔使を。免ハ。ニとも。我意をとゝくせよと
ハ。免ハ平まゝ。まゝ此度ニかゝ。きと云ハ。如何なるゆゑ。高時答ゝ。此度の疑ひ
ハ。天下の為なり。天子御謀叛の御企有之ゆ。慥ニ内通の者ありと。へども。猶微細を尋

いよく世の乱を發ハ。遠島ニ迄ハ奉り。天下泰平の基を聞ハるを計るゆ。奏
聞ニなるべきや。是のごとき。政道を。妨ハ。しるゆハ。必定謀叛の一味なりと。速ニ内裏
ニて。此由を奏聞ニなるの。企を。ニ奉るや。左なくハ。のゝ。免捕て獄屋ニ繋ハいつ
や。いろ〻と。言語同断のゆゝさまなり。藤房卿ハ優々緩ハして。不審返答ときくるの
のゆ。天子ニ御謀叛の企ありとは。ハのハを。ニハ平ニや。其意を得ずとなりりんハ。茶
高時怒をなゝ。御謀叛の御企を。ちゝぬてゐるニまぎれし。舌振ひ進ハとなるの
るとものなまゝ。其ニなんの御目的ハ。他ニなりゝ。鎌倉将軍兵執權北条や
と云。終ざるゆ。藤房卿忽怒の色をなす。天子ニ御謀叛のゝ。恐れなき
十条なり。神慮ニ背き謀り平ハるのゝ。御謀叛とも云べき。鎌倉将軍執權北条
など。奢ニ長ハ。天子を蔑ニなと。其罪を糺さんとハ。是を御謀叛なりと。称ハ
公家宦人を召捕。雑人の賀ハ。天位を傾け仕ての企。神罰免々ところよ。警武威

さもて。一旦の勝利と獲るとも。なんぞ子孫の後栄のよんや。北条家の滅亡を招に似たり。是非を論ぜざ。天位を傾と思へ。先藤房をきろべ。と。席を進ゝみ出て理明白なるゆゑ。流石の高時も関口を。門三十八。武士三百六十人。一人として詞を發さる者なく。廣々たる席中。何れも頭を垂れ眼を閉。さながら〳〵森りしごとくせ秋田城之介時顕進ゝ出て。御理解のおもむき畏り。高時をとゞめ。一統口を閉て罷在り。此上仰下さるゝ上。およそ今日御旅館へ御引下され度。何れ日日の罪をゝび奉んと願いれば。藤房卿曰く。然バ三人の禁獄を速く免さべ。と。堅を立てゝ〳〵として。旅館へかへるべ。高時やう〳〵頭をもたげて曰。藤房舌を振ひ當前の理を解と。いへども本意ゆゑ。助け置。後日の防げ。彼等帝へ進め奉り。鎌倉を亡さんと企る条。悪き振舞ひなり。此上ハ是非を論ずるゆゑ。兵を出し。藤房の首をきつく。北条家の災を除ん。速く其用意せよと。厳しく下知を傳へられバ。礼なも儀をもとゝまぬ。猪武士たゞ高時ゆゑ諂ふく。下知をうけゝゝの。専その手配りを進ゆる。秋田時顕大いに驚き。高時を諫て曰く。武威をもて。公家を罰ことハやそれども。朝敵の名を得るとき。背きて隨ふ者なし。されバ北条家の滅亡を招くが如し。速く三卿を免し。都へおくりまゐべし。永く鎌倉へ止め置バ違勅の罪免れがたく。北条の家名の滅れ。猶豫なるべに。いへ〳〵と。強く諫めるべ。高時も是非ゆゑ。其意ゆまの。三人を免し。藤房々とも。ゆゑ都へおくりのぼる。藤房々三々とともゆ。都へのり直ゆ。参内して。鎌倉の不礼言語ゆ絶たるよし。微細ゆ奏聞ゆおよびゆゑ。帝いよく逆鱗つよく。高時を三さんと。密ゆ催しおひらる。北条高時ハ。秋田時顕の強諫ゆよりて。藤房卿をとゞめ。三卿を免し。のちとゝいへども。猶怒りを止ざ。大軍を發。都へ推登り。帝を遠嶋へ遷し奉んと。関東八州の。勢兵を催促ゆおよびる。秋田城之介時顕。今ハ諫ゆよたよりなく。北条家の滅亡遠のゝぎるを察し。鎌倉を退去して

行者母公と
ともに
唐土へ
飛行
します

勢刀朝熊岳の麓朝熊村築松庵と云る。禅庵ゑ塾居し。天下の治乱を窺ひ終ゑ此庵ゑて没せしる。則山内ゑ塚あり。猶遺物として。太刀八天国之作寺ゑ納る。差添脇八同村之住。橋本助左衛門ゑ譲しる。まゝ秘法の膏藥あり。是八野間因幡といへる者ゑ傳しる是を諸人助の為ゑとて賣藥とし。て。朝熊岳の万金丹と号。却説鎌倉秋田時頼退去の後八。佞臣等時を得て。高時ゑ諂ひ。眼前の賤理を論じ。後難を忘る。高時愚さして。天罰を顧ず。専軍勢をそろへ。不日して京都へ推寄る手配りなさしまする。此る都へ聞へんハ帝やせこのしざるゑにおゝしめ。急ぎ都を出御あり。南都の方へ行幸しまゐらせとゝ。此地も御心ゑのなど此時山城國笠置山八要害堅固の岩窟ゑあるゆ。奏聞ゑおよぶ者あり。依之直ゑ皇居を近し奉る。此岩窟ゑおゐて。近國の武士を御催促あり。追々参着の者あり。といへども。皆微禄の者ゑして。従者五十人ゑすぎず。是の如小勢ゑて八鎌倉の大軍を防事かゝしと。慮慮を悩し。其時奏し奉りる

八河内國ゑ楠正成と云者あり。文武ゑ達して。常ゑ北条高時の政風を悪河内赤坂と云所ゑ潜居ゑよし。なり。方々卒八得易く。一将八難得と云へる。古語ゑ習ひ此者を召よせられ。彩幣をとゝ。紛ゑ八。招ゐ。て。軍勢八集へしとなり。依之万里小路藤房卿。勅命を蒙り。笠置の老僧を引導者として。河内赤坂ゑ行く。正成ゑ對面し。勅命の旨もむきを演べんハ楠正成謹でうけたまはる。藤房々ゑ隨ひ。笠置の皇居ゑ至る。則奏聞ゑ及。感慮不斜三座近く召寄たまひ。逆賊北条高時を誅戮もべき旨。勅命を下さる。正成謹で。今度鎌倉の大軍八必ず。武相の勢ゑのゝべ。日本六十余州の勢をしく。推寄ると。武藏相模の両國勢ゑ八。ひとりがゝしといへ然れども。北条高時奢ゑ長じ。たんハ。のぎむくゑやすし。志のしゑがゝ。軍法ゑ八。進退のかけひきのうちのなんハ。一旦の勝負。御覧あるべし。正成存命仕ハ。聖運ひらこのせゑ。ゑべしと奏しけり。帝深くよろこびゑ。急ぎ其手配りあるべしとの勅く

楠正成衆て。河内赤坂城に籠り。籠城せ。亦時鎌倉の軍勢。大仏陸奥守を大将として
大名六十三人。惣勢二十六万。七千六百余人と聞へたり。京都六波羅ハ常盤駿河
守。三万余人を率ゐて。鎌倉の大軍に力をあはせ。笠置の皇居へ推よせる。鎌倉
ぢ八。河内赤坂へ向へたり。此時楠家の籠城。僅五百余人なり。常盤駿河守ハ
三万余騎をたゞせ。帝を隠岐國へ迎へ奉り。楠家ハ奇計をめぐらし。去城城
を逃れぬ。鎌倉勢も。ありどをとへども。再び大軍攻登ると聞へりを。同國千破
矢城籠城せ。其勢総八百余人なり。鎌倉勢八十万余ときこへけり。志のれども種々
の智略をめぐらし。防戦に奇計をなす。敵を脳を不思議の良将なり。依之よせて
大軍攻めぐて。遠巻をぞ。たりける。楠家ハ。せて。少も。座をるをなく。間者をはなち
自由に諸方へ通達し。籠居をこし。も。怠りをなりける。奇手の諸将心をるこ。ち
よりて。詩哥連誹碁双ハ或ハ酒宴に床も多なりける。然るに大塔宮ハ高野山の奥に

在く。赤松律師則祐に命じ。赤松圓心に奇計をさづけ。則祐直に播州へ急ぎ行
て。父圓心に對面し。大塔宮の令命を傳ふ。圓心即時に一門の兵を集めて。軍配を定めて
京都六波羅を攻ける。急なり。常盤駿河守驚て。鎌倉へ訴。高時急ぎ下知を傳
遣す。の勢を差向る。然るに京都に近くちかて。其勢の中より。足利高氏宦軍に
屬し。赤松圓心に力をあはせ。六波羅を攻む。北条左近将監時益。同越後守守時等
終に戦死。餘ハ散々に逃行。まる。降人となるも多。依之千破矢城の
圍も忽に解たりしハ。是より楠赤松力を合せ。帝を迎へ奉るをなり。亦時
名和伯耆守長年ハ帝を迎へ奉り。伯耆國船上山に。皇居をとり。守護し奉る
依之隠岐判官倩高。佐々木彈正左衛昌縄馳せ。のぼり戦。長年の軍配
みひしぐ。昌縄ハ戦死。倩高ハ逃れ去りぬ。依之近江者に。長年帝を守護し
やすくと。船上山を出。都へ還幸を進め奉る。此すゝ國々より。都へ注進をなす

て楠足利赤松いづれも。播磨まで。いぐく。迎へ奉り。元弘三年六月五日。都へ還幸なりぬ。この時
新田義貞。北条高時を亡し。将軍守邦親王。鶴岡に籠りぬ。剃髪染衣の
身となりぬ。道ゆきよりて。佐渡に。流し。帝御心やさしくなぶしめしぬ。此時
大塔宮護良親王。悪僧どもあまたよりぬ。征夷大将軍に任じぬ。天下の政事を主
どりあまたよりぬ。兼平の御世とぞなりぬる。然るに足利高氏。征夷大将軍を
望とへども。大塔宮其任にあたらぬよしをいひ。我望の空しくなり。何とぞして宮
を退けん。種々の悪計を企けるに。今帝深く寵愛し給へる。准后。大塔宮と。其中
不和なるよし。是を聞て。高氏幸ひの事なれば。准后に謂ひて。大塔宮に。御謀叛
の企て有之よし。讒言をなびりぬ。帝。准后に。御愛情ふかきゆへ。讒をまことにして
罪なき。大塔宮を。高氏の子。左兵衛尉直義へ預けるよし。聞へりしかば。方里小路中
納言藤房卿。楠正成大に驚き急ぎ諫奏し奉りといへども。准后御側に在て

坊らを忠諫を用ひたまはざる。終に左兵衛尉直義にゆづりて。鎌倉へおくりぬれば
藤房卿。再び世の乱れゆくを悲みて。楠正成に遺言して。都を逃れ出で。山中に入
て再びいでたまはず。楠。世の乱れゆくを知りて。武士の道世。戦場に死を清く
せんものをと。此時より。戦死の心を決せり。とかもに。新田左兵衛尉直義。大塔宮を
土牢に入置けり。北条家の残党旗をひるがへし。聞へりしかば。高氏勅命を蒙り
鎌倉へ馳むかひ。直義と力を合せ北条の一類を亡し。猶謀て。関西伊賀と。この
者ども。合戦。大塔宮を殺害し。北条の類尽くし害せしと。奏聞なりぬ。猶
追討を請ひけり。然れども。天罰免れがたく。終に露顕なりぬ。追討の軍勢
をさしむけらる。高氏朝敵となりぬ。八万の軍勢を催促して。都へ進よりぬ
なりぬ。其勢八十万余と聞へりしかば。都なる。防戦の方配りの。猶准后
の口なほ。新田義貞を大将とし。楠正成を副将とし給へり。

楠偏執の心さとになく義貞方を今せ奇計をめぐらし。八十万余の大軍を
數度の戦ありなやまし。終に足利兄弟を。西國へ追下し直に追討をべき所。暫
人馬の息を休んとて都に還り合戦の始末を奏聞するなり。義貞ハ楠の武畧
ふかきよハさるよろこ。種々の賂を運び詣ゐ。准后ハ唯敬をこうくるのみ
ゆゑ。何のときまへもなく今度楠の戦功を。新田にかへく奏し。依之新田義
貞を。左中将に任じ。楠ハ何のさしもおよばれぬ。猶其ゆへ准后のたのゝ
て今當の内侍を。義貞に賜ふ。義貞ハ内侍の。艶なるにまよひ。出陣の心さらにな
楠正成出陣をいそぎ。新田への催促再三におよバゝ。病有と偽りて對面
をさへなさゞりしハ。是ハ容易ならぬ。追討延引におよぶ。智謀ふかき。足利兄弟
不日大軍を發し。攻登るべしとハ。急ぎ參内して。今度足
利兄弟を西國へ追下とゝ。いへども。捨置ハ近きに大軍を發し。攻来るべし。速く追

討の勢を差むけ。どんバ大乱の基なり。新田義貞病ひつく。出陣なりがたし。正
成ハ大将の命を賜ハゞ馳むかひて。一戦におよび足利兄弟の首を見ること。正成の
謀畧にのゝ。出陣を乞奉り然るに防門信忠参議光經ハ義貞ゆゑ。なく
賂をうけし者ゝ今義貞虚病なるをきゝ。正成の願を妨げ。奏聞
ふかくよ。依之空しく。陣所にかへり。佞臣殿上に在てさまゝ。ゆゑをなさもへ力なく
ハゞ足利兄弟攻きたらバ速に討死して。帝の御夢をさまし奉んかなしき
新田義貞合戦をうちまゝ。足利の世となるとん。其時帝を迎へ奉り地を
見立置んとて。吉野山に登り。皇居の地を定めんとを。役行者に祈り。不時忽
行者出現して。女ハ誠忠を憐ゝ。今皇居の地をさづくるなり。是まゝ你き
因縁なり。女ハ父楠正玄年四十歳におよびて。子なきをなゝ歎き。何卒志貴山
に登り毘沙門天王を祈りて授りしハ。此女なり。志貴山に安置をする。毘沙門天王

我前生の守屋退治の時勝軍木として自作り兎の中のおさな勝利を得し尊像にて霊験のいちじるしなり。此因縁によつて皇居の地を教へ早く来と先立峨々たる峡山に登りぬる。行者前生の事本文くわしく楠正成行者の御後をもとらひ登りけり。行者八賀谷生と八方呼まして告曰く此所は要害の地と定め置百万の大軍攻寄るとも。登りてはさしも必ず是に違へぬなりとおしへ直ちに虚空を踏んで山上ヶ嶽のうへとびさりぬ。楠正成奇異のおもひをなす。行者の御ものとなる。其地を見るに峡岨の山頂に平地あり。まことに霊水まんまんとして不思議の城地なり。此所に縄張して皇居の地とさだめ。それより都へ馳登り少。尓時遠察ありてこの人違ハず。足利兄弟八西國勢七十万余の大軍にて攻登るよし。住進御の歯を挽ガ如し依之殿上係に周章し。新田義貞八摂及兵庫へ出張せ。楠正成摂州櫻井の宿にて正行に吉野皇居の地を。行者の告

ぬごとく微細に教へ恩智左近太郎備一に十人合せ皇居を迎へ奉るべし。二十歳にかのうまで彩幣を備に頭けこのかのうちを軍事を母に談ぜべのうちを遺言して総七百人を率ひこの棋所に桑川へ出陣する。正行八七千六百余人をひきて。河内赤坂へ帰ひそかに皇居の中に入る。正成七百人をもて七十万の大軍にかこまれ。三日の戦に毎度勝利を得ることへども。もとより覚悟の事なれば心静にあご酒宴を催し。主従六十三人自害して赤坂城を耀ぬ。和漢にまれなる良将なり。足利高氏八大軍をなげき。新田義貞を退散し。都に乱入して東きと本陣にて光厳天皇を帝と仰き。後醍醐皇を花山の古宮に推戴。越智伊賀守を参謀とも。此花山の古宮と八方荒宮にてさぶら配所の如し中務乃唯八命側にさもとおりなる哀れなり。然に正行父の遺言を堅く守り吉野に皇居を設け。恩智備に使として越智伊賀守を解て。官軍に盛せ。楠家の勇士四人建武三年十月十日の雪の夜古宮に志のび。越智に力を合せ竊に吉野へ押し奉り

吉水院。實成院の両寺を皇居として。守護し奉り。然るに。足利高氏大軍を差むけ。四条縄手の戦。楠正行此戦場に討死せ。依之足利勢。吉野に推寄り。帝ハ賀名生に籠り給へ。よせての大軍近き見る。嶮岨なるに。眼を驚かすのみ。攻登るべき方なし。依之人馬の息を休め。再びよせる。前に倍して。峨々たる高く聳へ。弥々登るべき道なし。是ハ道を違へしかとて。馳廻る。猶々人馬の道路絶たり。高野越後守師業高野武蔵守師直。烈しく下知を傳へ。数万の軍兵一度に攻登れとも。此時係に白雲起て山の腰に来る。歟さかのぐ。雲中に在が如し。惣勢不幾天を仰ひぐ人たり。依之力なく退きてより。再び歟を者なくやもくと皇居を定め給ふ。是偏に役行者の御威徳なれぐて。後醍醐天皇勅を下し。多くの櫻を植させ給ふ。蔵王権現への千向と一事。年々に繁茂して。千本の櫻と成なり。此を今権現の御愛樹と成ぬ。

役行者御傳記圖會卷之下終

跋

支人東海子混跡於市俗以舌耕為業而其講説忠臣烈婦勇俠道士傳真禪生履歴以至于行住卧坐喜怒笑泣之狀千態萬貌女決江河遣諸侮使兒女童蒙輩或笑或楽或怖或慽雖親接真人目擊其事永不可得如斯之詳密精細而其意終歸於勧懲而後止而已矣新書之作固書價之所請特其延休唾

瀧川

餘不終數日而成者雖固非其本色亦足以推其才思矣而役行者靈驗奇特神變不測之說言々句々有眞實有方便筆隨其所欲言混々涌出者眞可謂奇作矣或曰奇則奇是亦何爲而作之嗚呼亦欲教信心道倍勸善懲惡至誠無私者猶其平素所講說云爾永己酉二月甲子辱知生保田碩苗跋於生玉白水堂

嘉永二己酉年
御免
同三庚戌刻成

大阪聚樂町
河内屋九兵衛

書肆

同農人橋壹丁目
本屋吉兵衛